



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	書評 : Richard Madsen著『Democracy's Dharma: Religious Renaissance and Political Development in Taiwan』
Author(s)	寺沢, 重法
Citation	宗教と社会貢献, 4(2), 31-38
Issue Date	2014-10
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/57051
Rights	『宗教と社会貢献』(ISSN:2185-6869)は、創刊号より最新号まで大阪大学学術情報庫 OUKA(Osaka University Knowledge Archive)にて全文公開いたします。
Rights(URL)	http://ir.library.osaka-u.ac.jp/web/RSC/index.html
Type	journal article
File Information	rsc0402-04terazawa.pdf



Title	<書評> Richard Madsen 著 『Democracy's Dharma: Religious Renaissance and Political Development in Taiwan』
Author(s)	寺沢, 重法
Citation	宗教と社会貢献. 4(2) P.31-P.38
Issue Date	2014-10
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/50282
DOI	
Rights	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<http://ir.library.osaka-u.ac.jp/dspace/>

書評

Richard Madsen 著

『*Democracy's Dharma: Religious Renaissance and Political Development in Taiwan*』

University of California Press、2007 年 11 月、Octavo 型、191 頁、\$31.95

寺沢重法*

1. 本書について

戦後長らく政治的・経済的統制の敷かれていた台湾は、1970 年以降大きな社会変動を経験した。蒋経国総統以降、徐々に民主化が進み、本格的な高度経済成長も開始した。中間層が形成され、人々の社会参加のあり方も変化した。特に 1987 年の戒厳令解除以降、政治・言論・結社活動が自由化され、人々の社会参加のあり方も変化し、宗教団体を含むボランティア・ソシエーションも誕生した。一方、急激な社会変動を経験した台湾社会では、価値観のアノミー的状况も生じた。特に階層移動を経験した中間層において「依拠すべき価値観」への希求から、宗教への関心が高まったとされる。このような複合的な社会変動の結果として生じたのが台湾における宗教の隆盛、すなわち本書でいうところの「宗教ルネッサンス」である。

本書は、宗教社会学を専門とする著者 (Richard Madsen) が、そうした「宗教ルネッサンス」およびその台湾の民主主義への貢献を論じた著作である。著者は米国カリフォルニア大学サンディエゴ校教授であり、アメリカの市民宗教・公共性を論じた *Habits of the Heart* や *The Good Society* などの重要書の共著者として知られる。*China's Catholics* などの中国の宗教状況に関する研究も発表している。さらに指導学生からは、台湾を代表する歴史社会学者／文化社会学者の蕭阿勤 (中央研究院社会学研究所・副所長) を輩出している [Hsiau 2000; 蕭 2010]。本書は、このように宗教社会学・市民社会論・台湾／中国研究において豊富な研究・教育経験を有する著者が、現代台湾における宗教と市民社会形成を論じた書籍である。

著者が本書で取り上げるのは慈濟会、仏光山、法鼓山、行天宮という 4 つの宗教団体である。前者 3 団体は台湾において「四大仏教」と称される大規模仏教団体のなかの 3 団体である (もう 1 つは中台禪寺 (中台寺) で

* 北海道大学大学院 文学研究科・助教 shterazawa@let.hokudai.ac.jp

ある。創始者は惟覺、本部現在地は南投県、<http://www.ctworld.org.tw/index.htm>)。慈濟会は証嚴によって1966年に(本部現在は花蓮県、<http://www.tzuchi.org/>)、仏光山は星雲によって1967年に(本部現在地は高雄市、<https://www.fgs.org.tw/default.aspx>)、そして法鼓山は聖嚴によって1985年に創設される(本部現在地は新北市金山區、<https://www.ddm.org.tw/>)。行天宮は道教系の団体である(本部現在地は台北市中山区)。外省人で基隆の炭鉱所有者であった黄欒によって1943年に台北の迪化街に創建されその後数回の移転を経て現在の場所に至っている(<http://www.ht.org.tw/>)。著者は1999年以降、これらの団体へのフィールドワークを継続的に行っており、本書はその研究成果をまとめたエスノグラフィである。

2. 本書の構成

本書の章立ては以下の通りである。2章から第5章のタイトルはいずれも各章で取り上げられている宗教団体名である(原著にはカッコ内の漢字名は標記されていないが、本書評では読者の便宜を考えて漢字名を付した)。

はじめに

第1章 The Taiwanese Religious Context

第2章 Tzu Chi (慈濟会) : The Modernization of Buddhist Compassion

第3章 Buddha's Light Mountain (仏光山) : The Buddhist Contribution to Democratic Civil Religion

第4章 Dharma Drum Mountain (法鼓山) : Transcendent Meaning in a Broken World

第5章 The Enacting Heaven Temple (行天宮) : Hybrid Modernity

結論

まず「はじめに」は導入として、1999年9月21日に発生した台湾大震災における慈濟会の復興支援の描写を通じて現代台湾社会における宗教のインパクトを伝える。そして1987年の戒嚴令解除以降顕著になった台湾の「宗教ルネッサンス」を論じることで、東アジアにおける宗教と民主主義の関係の解明ならびに現代世界が直面する宗教対立・宗教弾圧を乗り越えるための示唆を得ることに寄与したいと主張する。

第 1 章は、事例研究の章の導入部分として、台湾の宗教状況の概況（仏教、道教、儒教などの概要、台湾における政教関係（特に国民党との関係）の概略）を述べている。事例として論じる 4 団体はいずれも台湾における最大規模の非政府組織であり、数百万人の信徒が所属しているとされとともに少なからぬ海外支部を設置している。団体の中核部分は僧侶等の宗教者が担うものの、寺廟等の伝統的な宗教集団に比べて一般信徒の自発的な活動の占めるところが大きい。一般信徒には中間層が多い。豊富な財政基盤をもつとともに各種社会事業（福祉、医療、教育、文化など）にも積極的である。またテレビ、インターネットなどの現代的メディアを活かした活動も活発である。また慈済会、仏光山、法鼓山の 3 団体については、社会的な実践活動を通じて社会改革を目指す「人間（じんかん）仏教」と言われている。このような団体を文化社会学・宗教社会学的視点から比較研究することを目指すという。

第 2 章から第 5 章は各章ごとに各宗教団体の詳細な教団史が説明されている。以下ではまず各宗教団体の簡単な概要を説明した後に、特に 1) 各団体の主たる担い手とされる中間層の特徴、2) 各教団で形成されている社会意識に焦点を絞って知見をまとめてみたい。

第 2 章で扱われている慈済会は証嚴によって 1966 年に「仏教克難慈濟功德会」として発足、設立初期には貧困者に対する慈善活動を行い、その後は医療活動に力を注いだ。その後、本部所在地である花蓮県で無料診療などを行い、慈済病院、慈済医科大学（現・慈済大学）なども設置している。現在の慈済会の社会事業は「四大志業、八大法印」と呼ばれ、「奉仕」「医療」「教育」「文書や映像による伝道」「国際支援」「骨髓バンク」「社会ボランティア」「環境保全」から構成される。信徒は約 400 万人、海外にも拠点を置き、台湾最大の仏教団体と言われている。

慈救会は自営業者、対人業務従業者（接客業など）が主たる信徒あるという。親孝行などの儒教的家族規範をより良き台湾社会を形成することに結びつけ、協調や権威を尊重すべきことを重んじる。大家族のイメージに基づいた理想社会を目指すべきことを重視する。こうした協調を重んじる価値観は顧客との良好な関係の構築が重視される対人業務従事者に適した価値観である。また家族経営型の自営業者にとって儒教的家族規範や大家族をイメージした理想社会というのはなじみやすいものである。

慈済会で育まれている伝統的価値観とは「中華的なもの」ではなく「台湾的なもの」であり、特に 1980 年以降高まりを見せた「台湾ナショナリズム」と通じるものがあるという。

以上の慈済会の特徴には慈済会信徒に本省人（特に日本統治時代以前に中国大陆の福建省から台湾に移住し、もともと閩南語を話していた漢人の子孫である閩南系本省人が多い。創始者の証嚴自身も閩南系本省人であり、証嚴の説法はしばしば閩南語で行われる）が多いこととも関連する。戦後台湾では、日本統治時代の大企業のほとんどが国民党によって国営企業として接収され、主に蒋介石政権とともに中国大陆から台湾に移住した外省人によって国営企業の実権を握られた。そうしたなか、本省人は、一般庶民向けの飲食業・小売業などのニッチ産業に活路を見出すことになり、多くの自営業者が生まれた。1980 年以降の台湾の民主化では、こうした本省人による「台湾的なもの」（台湾ナショナリズム）を求める風潮が生まれる。慈済会はまさにこうした人々が中心であり、自営業者・対人業務従事者に親和性の高い協調・伝統的家族規範や「台湾ナショナリズム」が醸成されるという。

第 3 章で扱われている仏光山は 1967 年に星雲によって創設され、信徒は約 100 万人と言われており、海外拠点も有する。特に教育、慈善、修行による人間および社会の向上を重視し、これらの社会活動にも積極的である。仏光山は企業経営者や公務員、政治家などが主たる信徒である。慈済会に比べて家族規範に訴える部分が少なく、中国仏教をベースとしつつもそれをエンターテインメント化・メディア化し、「メガチャーチ」のような特性を備えている。「台湾的なもの」やエスニシティー色は出さず、むしろ台湾の枠を超えたグローバルな社会の発展を理想としているという。仏教のメディア化・エンターテインメント化は、特に自社事業の拡大と大規模な宣伝に関心をもつ企業経営者に好まれるスタイルである。台湾の枠を超えたグローバルな社会やエスニシティー色を出さないという点は、特に公務員、政治家に親和的である。公務員や政治家は依然として外省人が多く、「台湾的なもの」よりもむしろ台湾の枠を超えた社会への関心に適合的である。

第 4 章で扱われている法鼓山は聖嚴によって 1985 年に創設され、会員は台湾に約 40 万人、海外に約 1 万人とされる。聖嚴は台湾で僧侶としての修

業を積むとともに、日本の立正大学で博士号を取得しており、法鼓山では仏典学習などの知識ベースの仏教理解が重んじられる傾向にある。中華仏教研究所という仏教研究機関を設置するとともに、環境活動・文化活動などにも教団として力を注いでいる。

法鼓山は医師や教員、研究者、技術者などの専門職が主たる信徒である。法鼓山では仏典学習や瞑想が法鼓山で行われる主たる実践である。全般的に儀礼は簡素化されている。特に瞑想による個人の精神的鍛練と自己コントロールが目指されており、瞑想を通じて悟りや精神的向上を目指すことが重んじられている。そして政治に関わるよりも、むしろ個人の精神的向上を通じて、台湾社会全体の向上と安定を図ることを目指しているという。仏典学習や瞑想の重視は、専門技能・知識を日常的に駆使する専門職に好まれる宗教性である。特にこれらの職業では、たとえば対人業務職や企業経営などに比べて、集団や人間関係に頼るよりも、個人の技能に頼る部分が大きく、個人の精神的向上を目指す価値観に適合的である。

第5章で扱われている行天宮は外省人で基隆の炭鉱所有者であった黄欽によって1943年に台北の迪化街に創建されその後数回の移転を経て現在の場所至っている。「宗教活動」「文化活動」「教育活動」「医療活動」「ボランティア活動」を活動の柱としており、これらに関する各種セミナー・社会教育などが行われている。境内地で信徒による読経や来訪者を対象としたお祓いなどが行われ、毎日多くの来訪者に溢れている。台北地下鉄「行天宮」駅前に所在することもあり、台北有数の観光スポットにもなっている。

行天宮は零細企業経営者や事務職・販売職などが主たる信徒であるという（台北にあることから台北市在住者が多い）。行天宮の特徴は「ハイブリッドモダン」にある。現代都市の中間層のライフスタイルに適合する形で、伝統的な民間信仰に現代的な要素を加えているが、民間信仰の本質そのものは改変していない。新たに付け加えられた現代的要素とは、たとえば地域ネットワークに依拠しないメンバーシップ、教団運営の分業化、儀礼からの「生々しさ」の除去など（境内で供物を祭壇に捧げる際に、供物である動物を殺すことをしない、など）。特に中間層において、事務職・販売職などの下層ホワイトカラー職は多くを占めており、伝統的な民間信仰になじみつつも、より洗練された、都市的な民間信仰を求めるこれらの人々に好まれているという。

「結論は、これまで挙げてきた事例を踏まえ、現代台湾社会における宗教の役割を問い直し、各宗教団体およびそこで醸成される社会意識と台湾の民主主義の関係が検討されている。宗教と政治が対立することなく、また儒教的家族規範、自己修練などが民主主義に対して貢献的な機能をもっていること、台湾のローカルな伝統に根差した教団が普遍主義化し、信徒に協調や協栄の重要性を認識させることで台湾社会の統合を可能ならしめていること、などが論じられている。

3. 本書へのコメント

本書は「ソーシャル・キャピタルとしての宗教」を論じた重厚な実証研究として極めて示唆に富むものと思われる。パットナムのソーシャル・キャピタル論においては、人々がボランティア・アソシエーションへの参加や各種ボランティア・アクションを通じていかにして民主主義・市民社会を形成するのかということにあった。その意味で「ソーシャル・キャピタルとしての宗教」を論じる際には、宗教活動への参加や宗教団体の存在がはたして民主主義・市民社会への形成に寄与しているのかどうかを問うことが重要である。本書はまさに、台湾におけるこうした問いに答えようとしている。

その時に、取り上げた教団の社会階層に注目している点が興味深かった。たとえば近年は、宗教を通じた社会活動への参加パターンは信徒や教派の社会階層によって異なることが指摘されている [Schwadel 2002]。台湾においては経済発展と高学歴化に伴って 1970 年代以降に中間層が形成され、中間層が台湾の民主化に寄与したことがしばしば指摘される [Hsiao(ed.)1999]。事例の 4 団体の信徒は一口に中間層といってもその職業構成は異なっており、それぞれの職業に適合的な宗教性・社会意識が形成されている様子を描こうとしている。

また方法論としても創始者のライフヒストリー、教団の発展史、教団刊行物を用いた教説の分析、信徒へのインタビューなど幅広いデータを活用しており重厚なエスノグラフィーとなっている。本書を読むことで、台湾における宗教と民主主義の関係のみならず各教団や近年の台湾の宗教状況についても深い理解を得ることができるのも魅力であろう。

もっとも、疑問に感じた部分がないわけではない。第 1 に宗教と民主主義を問うという本書のテーマからすると、政治への言及がやや少ないことである。たとえば信徒へのインタビューについて言えば、信仰や家族意識などに比べて、政治や公共性などに関する信徒へのインタビュー結果や信徒の投票行動や政治参加行動などの分析が本書にはあまり出てこない。信徒の宗教性は政治意識や政治行動とどう結びついているのか。さらに教団史・組織論の点では、各教団と台湾の政治との関連についてもさらに詳しく知りたいところである。これだけ大規模な教団形成が可能だったのであれば、その成長を可能ならしめた政治的要因があると推測される。そしてその政治的要因は、本書で述べられたような各教団の民主主義的価値観の形成にも影響を与えたのではないか。どのような政治的構造と結びつきながら教団が形成されてきたのかという問いも今後検討していく必要があると思われる。

戦後台湾における仏教・道教・キリスト教・一貫道と政治との関わりについては、瞿 [1997] や Kuo [2008] のまとまった研究がある。また近年は「台湾社会変遷基本調査」などのサーベイデータを用いた宗教と政治意識／社会参加行動の関連を分析した実証研究も行われつつある [Chang 2010a 2010b 2012; Kuo 2008]。今後これらの研究を踏まえながら本書で取り上げられた教団と政治的構造との関連を検討する必要があると思われる。

第 2 に、各団体信徒の社会階層と宗教性・社会意識の関係が明らかにされているが、それらの差異が社会階層そのものの影響によって生じているものなのか、それとも社会階層は見せかけの要因なのかどうか気になる。たとえば慈済会は自営業者やサービス業、仏光山は公務員や政治家という知見だが、戦後台湾では本省人（特に閩南系）に自営業者やサービス業が多く、外省人に政治家や公務員が多かった。慈済会と仏光山の創設者もそれぞれ本省人と外省人である。そのため慈済会と仏光山はそれぞれ本省人コミュニティ、外省人コミュニティという側面もある。慈済会にみられる「台湾ナショナリズム」などはまさにそうしたエスニシティ構成を反映したものとも思われる。一方で近年の台湾では多元化が進み、エスニシティと社会階層の対応関係が溶解しつつあるとも言われている。各教団の特徴が社会階層に根差したものなのか、エスニシティに根差したものなのか、それともそのどちらでもないものになりつつあるのか。今後の検

討課題であると思われる。

第3に、本書は4団体を比較するという構成だが、比較項目がやや一貫していないような印象を受けた。先に、本書は4団体に信徒の職業構成に適合的な宗教性・社会意識が形成されている様子を描こうとしていると述べた。しかし、たとえば市民文化や台湾ナショナリズムなどについては第2章(慈濟会)と第3章(仏光山)では節を設けて言及されるが、第4章(法鼓山)と第5章(行天宮)では明確に言及されておらずむしろ宗教性に関する言及が中心であり、社会意識の部分があまり明確に描かれていないような印象を受けた。そのため各教団の比較ポイントがやや読み取りづらいところがあった。

もちろんこれらの課題があることは決して本書の意義を損ねるものではない。本書は近年の台湾における宗教変動をわかりやすくまとめ、宗教と社会形成、社会階層といったテーマについて多くの示唆を与えてくれる。台湾のみならず東アジアにおける宗教と社会貢献を考える際の必読書になると思われる。

参考文献

- Chang, Wen-Chun 2010a "Buddhism, Taoism, Folk Religions, and Rebellions: Empirical Evidence from Taiwan" *Journal of Asian and African Studies* 45(4):445-460.
- 2010b "Religion and Preferences for Redistributive Policies in an East Asian Country" *Poverty & Public Policy* 2(4):81-109.
- 2012 "Eastern Religions and Attitude toward Direct Democracy in Taiwan" *Politics and Religion* 5: 555-583.
- 瞿海源 1997 『台灣宗教變遷の社會政治分析』 台北市：桂冠圖書公司。
- Kuo, Cheng-Tian 2008 *Religion and Democracy in Taiwan*, New York: State University of New York Press.
- Hsiao, A-Chin 2000 *Contemporary Taiwanese Cultural Nationalism*, London: Routledge.
- 蕭阿勤 2010 『回歸現實——臺灣一九七〇年代的戰後世代與文化政治變遷 (第二版)』 台北：中央研究院社會學研究所。
- Hsiao, Hsin-Huang Michael (ed.) 1999 *East Asian Middle Classes in Comparative Perspective*, Taipei: Institute of Ethnology Academia Sinica.
- Schwedel, Philip 2002 "Testing the Promise of the Churches: Income Inequality in the Opportunity to Learn Civic Skills in Christian Congregations" *Journal for the Scientific Study of Religion* 41(3):565-575.